4　むすび

本章では，製品開発プロセスの初期段階の目的と方法について，おもに論じた。

探索的段階ともいえるこのフェーズでは，製品コンセプト，そして，基本的な特色を決定づける重要な段階であるが，溢れる二次的情報の処理，過去の成功と失敗の体験，他社の動き，権威的な意見，企業内の政治的な思惑など，多くの要因が複雑に絡み合い，ともするとそれらの妥協点を探ることに時間を費やしてしまう。探索的という言葉自体，方法論が明確でなく状況依存的であることを含意し，その行為プロセス自体が見過ごされてしまう傾向をもつが，その目的はユーザニーズの定義にあることを明確に意識する必要があるだろう。ニーズを定義するとは，ユーザの問題状況を新たな構図に定めることであり，リフレーミングを行うことである。その目的のために，われわれが乗り越えなくてはならない認知的な問題，社会的な問題と，開発チームで共有できる可塑的な探索手法を紹介した。

開発初期の探索段階における成果は，必ずしも一つの製品に収束されるものではないだろう。根源的なニーズは，違った形態を伴っていくつかの解決案，つまりいくつかの製品プロジェクトに結びつく可能性がある。こういった，応用可能性の高いベーシックなニーズ調査を継続的に行うことも戦略的な方法であると考えられる。

ユーザニーズを理解したうえで，問題状況に革新的な変化をもたらすアイデアを創造することが，デザイナーとエンジニアの役割である。チームのダイナミクスを活かし，企業の組織力を最大限に利用するのが，メーカの開発である。問題の理解，ソリューションプロセスを共有できる思考のプラットフォームが必要である。アイデアの展開(Ideation)とアイデアの評価(Evaluation)を，意識的に区別することも，組織的にアイデアを生み出すときには重要である。アイデアの生成と評価の繰り返しを，多様な媒体，思考法を柔軟に取り入れながら開発を進めることが，イノベーティブな製品へとつながる設計プロセスと考える。

引用・参考文献

1) A. H. Maslow，小口忠彦 監訳，“人間性の心理学”，産能大学出版部(1987)，p.55-79.
2) J. L. Adams，“Conceptual Blockbusting”，Addison－Wesley(1986)，p.13-81.
3) B. Edwards，北村孝一 訳，“脳の右側で描け”，エルテ出版(1994)，p.61-80.
4) 佐々木正人，“アフォーダンス－新しい認知の理論”，岩波書店(1994)，p.47-52.
5) E. S. Reed，佐々木正人 監修，細田直也 訳，“アフォーダンスの心理学－生態心理学への道”，新曜社(2000)，p.41-57.
6) 後藤武，佐々木正人，深澤直人，“デザインの生態学－新しいデザインの教科書”，東京書籍(2004)，p.163-165.
7) 佐藤郁哉，“フィールドワークの技法－問いを育てる，仮説をきたえる”，新曜社(2002)，用語解説ページ
8) S. Squires，B. Byrne，“Creating Breakthrough Ideas”，Bergin & Garvey(2002)，p.104-114.
9) R. A. Faste，京都工芸繊維大学における特別講演 “Teaching Observation”での内容(2002)
10) W. S. Green，P. W. Jordan，“Pleasure With Products : Beyond Usasbility”，Taylor & Francis (2002)，p.182-183.
11) J. Buur，T. Binder，Eva Brandt，Taking Video beyond ‘Hard Data’ in User Centered Design. In Tutorial Notes，Interact 2001，www.interact 2001.org/Tokyo 2001.
12) 川喜田二郎，“発想法”，中公新書(1967)
13) T. Kelley，“The Art of Innovation”，Currency / Doubleday (2001)，p.92-93.
14) R. H. McKim，“Experiences in Visual Thinking”，PWS(1972)，p.1-13，p.38-44，p.122-128.
15) J. W. Young，今井茂雄　訳，“アイデアのつくり方”，TBSブリタニカ(1988)，p.27-55.
16) 湯浅泰雄，“身体論－東洋的心身論と現代”，講談社(1990)，p.253-274，p313.
17) IDEO，“IDEO University-Engineering Innovation Workshop in Tokyo(1993)”，p.7-9.
18) T. Buzan，佐藤哲，田中美樹 訳，“頭がよくなる本”，東京図書(1997)
19) T. Buzan，田中孝顕 訳，“これが驚異のマインド・マップ放射思考だ！！－これで他人を決定的に引き離すことができる”，騎虎書房(1996)
20) V. North，T. Buzan，田中美樹，佐藤哲 訳，“頭の取扱説明書”，東京図書(1999)
21) J. L. Adams，“The Care and Feeding of IDEAS”，Addison－Wesley(1986)，p.111-112.
22) K. J. Holyoak，P. Thagard，鈴木宏昭，河原哲雄 監訳，“アナロジーの力”，新曜社(1998)，p.34.
23) G. Lakoff，M. Johnson，渡辺昇一，楠瀬淳三，下谷和幸 訳，“レトリックと人生”，大修館書店(1986)，p.4-31.
24) M. Schrage(T. Winograd，瀧口範子 訳)，“ソフトウェアの達人たち－認知科学からのアプローチ”，アジソン・ウェスレイ(1998)，p183-189.